

## 第 15 回：伝えて受け止めまた伝える

教場長 田中仙融

美味しい和菓子をいただきたくて、また、何かのご縁で稽古を始められたという方がほとんどで、最初からこの道一筋と覚悟して茶道の世界に足を踏み入れられた方は少ないと思います。

幼いころから遊びのように帛紗や柄杓を扱い、畳を歩く足摺の音が好きで、みなさんが稽古をされるのを拝見するのが楽しいと思っていた私も、その一人です。

本部での仙樵忌を終え、今年は祖母董仙の十三回忌という事もあり、福知山の菩提寺、洞玄寺で行われている仙樵忌にもおまいりをさせていただきました。法要が終わり、別席で興支部の方が、祖母が大切にしていたという道具を使って、茶を振る舞ってくださいました。

「どういった道具かわからないのですが、董先生が大切にされていたので、きっと仙樵先生から譲り受けられたものと思うのです。」などと説明をしてくださいました。

中には、見覚えのある茶碗もあり、祖母から私が道具への思いを聞いておけばよかったと、洞玄寺を後にしました。

ふと、祖母からの伝え、そして多くの先生方からの教えは、私一人のものにしておいてはいけないのだと改めて気づかされました。誰も、習っているときには次に伝えるためと思って受け止める方は少ないと思います。しかし、伺った事柄は自分なりに咀嚼しておきましょう。誰かに伝える機会が必ずあるはずです。

茶道に限らず、日本の文化は教え、教わり、人が伝えそして豊かに作り上げたものです。教わらなかった、では、もったいないのではないのでしょうか。みなさん、教える立場、教わる立場の方もどちらも、教わり、教える機会が待ち受けています。一人一人が小さなことを伝えていく、そしてそれを受け止める気持ちを持つこと、その姿が美しいのではないのでしょうか。

平成 27 年 11 月発行 会報「えんじゅ 85 号」掲載